花の歳時記

花材料は日造協フラワーガイドシステム http://www.jalc.or.jp/ へ

ギボウシ

ミソハギ

シャスターデージー

●花の歳時記はホームページにも掲載中。カラーでご覧いただけます。

【ギボウシ】

Hosta Tratt.

和名：別名	疑宝珠、葱坊主、ウルイ、アマナ、ユリッパ、ヤマカンピョウ、ヤマホウズキ、シガク
英　　名	Hosta、Plantain Lily、Funkia
科名　属名	ユリ科ホスタ属
花　の　色	白・薄紫・紫
花の観賞時期	6月下旬～8月
葉の観賞時期	4月～11月（草姿、新芽と黄葉、品種によっては斑入や覆輪の葉）
植付け期間	3月
性　　状	落葉性宿根草
高さ（cm）	30～100（大型のものは花茎～200）
幅　（cm）	30～50内外
植付け範囲（cm）	約50×50
日照条件	半日陰が最適だが日向・日陰でも育つ
土壌酸度	問わず
土　　質	問わず、やせ地のほうが良く育つ
耐　　性	耐陰性あり、夏の直射光は日よけ、過肥だと白絹病
用　　途	花壇、グラウンドカバー、鉢植え
流通形態	ポット苗
原　産　地	日本、中国
花　言　葉	沈静

イギリスでは「Hosta」の専門紙が出るほど諸外国では熱狂的な支持を受けているギボウシ。本家の日本では、元来山野草としてまた庭園の下草としてそれこそ侘び寂びの薬味的な使われ方をする、しっとりした植物のイメージがありました。が、昨今のガーデニングブームでそれこそ多種多様な園芸品種が逆輸入されるようになり、一躍ギボウシが主役に据えられた個人邸の寄せ植え花壇や木陰の植込みをよく見かけるようになりました。

その魅力は楚々とした風情の花よりも、斑入り変異の大きい葉に比重があり、日陰でもくっきりと目立つ広がった葉の重なり、新芽のはっとするような緑の鮮やかさ、湧き上がる水のように盛り上がる株の草姿、秋の黄葉、と枚挙にいとまがありません。そして忘れてならないのが「食べられる」という点。実はギボウシといわずに「ウルイ」という名を出せば、日本全国この植物を知らない年配者はいないのではといわれるくらい、山菜としては有名でした。若い葉柄部分をゆがいて酢みそや胡麻和え、天ぷらにするそうで、味がカンピョウに似ることからヤマカンピョウの名もあるということです。ちなみに薬草としては腫れ物に効くとされ、オオバギボウシの全草を刈り取り、乾燥させたものを煎じて患部を洗ったり、コバギボウシの生葉の汁も応急手当につかわれたようです。

「ウルイ」は春先の若葉が丸まって立つその頃の葉色が瓜の皮に似ているので瓜菜が転化したとの説。そして「ギボウシ」は擬宝珠で、花の蕾が橋の欄干についている擬宝珠に似ていることからその名がついたというのが定説です。瓜の皮も欄干の飾りも縁遠い21世紀人は、おそらく「ホスタ」＝寄せ植えの必須アイテムとしてその認識を深めていくことでしょう。

（㈱日比谷アメニス　橋本智美）

【ミソハギ】

Lythrum salicaria anceps.

「みそ萩の花さく溝の草むらに　よせて迎火たく子等のおり」若山牧水

お盆の頃に花が咲き日本の各地で仏前に供えられる伝統のある草花です。名前の由来は、『聖霊棚に水をかけるのに使われるので、「水をかけて身を清める」→禊（みそぎ）、花がハギに似ている→萩、この二つの連想が組み合わさったもので、もともとミソギハギ（禊萩）という音がつまったもの』、といわれているようです。ところによってはボンバナ、ボングサと呼ばれることも多く、田園地帯ではお盆の供花として使うためか、田のあぜにぽっと紅紫色の一群れが刈り残されている光景を時折目にします。

丈夫で、株分けでも、お盆の生け花の使い残りを差し芽した程度でもよく活着します。日当たりの良い湿地を好むので、造園では水生植物として扱われることが多いのですが、実はひどく乾燥する場所でなければ陸地でも十分成育できるのです。現に某試験場の屋上植栽では、この4年ほとんど無管理でも毎年勢力範囲を拡大しながらしっかり花をつけています。

薬用として「千屈菜（せんくっさい）」の生葉名があり、下痢止めに乾燥した全草を煎じたものを食前に服用するとよいと薬草図鑑には記されています。また若葉や花は摘んでゆがいて和え物にして食べられるそうで、さらに花はそのまま生食も出来るのでサラダの彩りに入れても良さそうです。

近年同科同属のエゾミソハギという、「名前は北海道限定を思わせるが、実はミソハギより分布域がずっと広い（北海道、北アメリカ、ユーラシア北アメリカを網羅）」種類が、ミソハギの名前で入荷され、造園の力で更に分布域を広げているとか。違いは茎に毛が多く葉の基部が茎を抱いている点なので、入荷したら一度目を凝らして細部を観察してみてください。

（㈱日比谷アメニス　橋本智美）

和名：別名	禊萩（みそぎはぎ）、溝萩（みぞはぎ）、水懸草（みずかけぐさ）、聖霊花（しょうりょうばな）、盆花
英　　名	loosestrife
科名　属名	ミソハギ科ミソハギ属
花　の　色	紅紫色
花の観賞時期	7月～9月
葉の観賞時期	5月～11月
植付け期間	秋または早春
性　　状	落葉性宿根草
高さ（cm）	50～100
幅　（cm）	5～15程度
植付け範囲（cm）	約20×20
日照条件	日向
土壌酸度	問わず
土　　質	壌土～ケト土（粘性土）
耐　　性	湿潤地に強い、過剰な乾燥には弱い
用　　途	花壇、水辺植栽、鉢植え、切り花
流通形態	ポット苗
原　産　地	日本（本州、四国、九州）、朝鮮半島
花　言　葉	悲哀

【シャスターデージー】

Chrysanthem Burbankii Makiko

和名：別名	シャスターデージー、シャスターギク
英　　名	Shasta Daisy
科名　属名	キク科
花　の　色	白色
花の観賞時期	５月～６月
葉の観賞時期	一年中
植付け期間	春３月～４月 秋９月～10月
性　　状	常緑、 宿根性
高さ（cm）	60～70
幅　（cm）	30内外
植付け範囲（cm）	約30×30
日照条件	日向
土壌酸度	ｐｈ６～７
土　　質	特に選ばない
耐　　性	強い
用　　途	公園、花壇、のり面、大面積緑化
流通形態	ポット苗、 種子
原　産　地	アメリカ

この花はアメリカの育種家ルーサー・バーバンク氏（１８４９～１９２６）が苦心の末に品種改良して作出した園芸品種です。

シャスターデージーはヨーロッパに広く自生しているフランスギクと日本に自生しているハマギクやコハマギクとの交配種であろうという説が一般的です。名前の由来は作出者のルーサー・バーバンク氏の研究圃場から見える真っ白に雪をかぶったカリフォルニアのシャスター山にちなんで名づけられたものです。また、学名は植物学者の牧野富太郎博士の命名によるものです。

この花は切花用としてさらに品種改良が進み、現在入手できる種類は清流・ハヤブサ・新高・銀河などがあり、いずれも清楚な白花で一重咲き、八重咲き、丁字咲きがあります。原種のフランスギクと非常に似ていますが、こちらのほうが、花首がしっかりしているようです。

性質は非常に丈夫で、日照を好み、土質は選ばずよく育ち、こぼれ種でも良くふえます。増やし方は実生か株分けによります。

播種の適期は９月ごろで、翌年には開花がみられます。また、株分けも秋口と春先に行えます。常緑性なのでのり面に利用するにしても、花壇に利用するにしても広い面積で群落として白い花の広がりにそのすばらしさが利用できるでしょう。

（日産緑化㈱　津田紘一）